

派遣報告書

- 1) 派遣者名 太田 悠介
- 2) 派遣先 パリ第8大学 (フランス)
- 3) 研究テーマ エティエンヌ・バリバールの大衆論
- 4) 派遣期間 2013年7月15日-2014年3月25日
- 5) 本学指導教授 西谷 修 教授
- 6) 派遣先指導教授 アラン・ブロッサ 名誉教授

7) 研究概要

本研究は「大衆 (masses)」の主題に着目して、フランスの哲学者バリバールの思想を全般的に考察するモノグラフィー研究である。このモノグラフィーを再構成するにあたっては、パリ高等師範学校時代の師ルイ・アルチュセールの強い影響下から次第に抜け出し、スピノザの大衆論に焦点を当てた『スピノザと政治』(1985)、世界システム論の代表的論者イマニュエル・ウォーラーステインとの共著『人種・国民・階級』(1988)といった1980年代以降の著作群を通じて、バリバールが独自の思想を展開してゆく過程を特に重視する。

8) 研究成果・今後の課題

本年度はまず、1960年代および1970年代のバリバールの著作について検討を進めた。アルチュセールらとの共著でありバリバールの処女作である『資本論を読む』(1965)、70年代の著作群『史的唯物論研究』(1974)、『プロレタリア独裁とは何か』(1976)、アンドレ・トーゼルらとの共著『マルクスと政治の批判』(1979)を具体的な考察の対照とした。この作業を通じて明らかになったのは、バリバールがマルクス主義のプロレタリアート概念の批判的な再検討を経ることで、プロレタリアートと大衆の弁別に向かうという点、さらに、大衆の政治的な主体化のひとつの様態がプロレタリアートであるとして、バリバールの思想において大衆がプロレタリアートを包含する上位概念の位置を占めるという点である。プロレタリアートから大衆へというこの主題の移行を、上記のバリバールの著作に加えて、この時期のバリバールの主たる参照軸であるマルクスのフランス三部作(『フランスにおける階級闘争』1850、『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』1852、『フランスにおける内乱』1871)およびレーニンの主要著作(『何をなす

べきか』1902、『国家と革命』1917)を併せて検討した。その結果、1980年代以降のバリバール思想の変遷に焦点を当てる本研究の土台を整えることができた。

本年度の滞在によって、バリバールに捧げられた国際哲学院主催の初めてのコロック「なぜバリバールなのか」に参加できたこと、またバリバールの思想をコンパクトにまとめて紹介する小著 Martin Deleixhe, *Étienne Balibar. L'illimitation démocratique* (Paris, Michalon, 2014)を中心として文献の収集ができたことも、付記しておきたい。この著作については、今後、本研究を進めるにあたって、全体の問題設定から細かな論点にいたるまで詳細に検討するとともに、本研究と同著との差異化が必要であると考えている。

このような研究経過を踏まえ、本年度は投稿論文を一点発表した(「矛盾と暴力—エティエンヌ・バリバールの政治哲学序説」『社会思想史研究』、藤原書店、2013年9月)。近年のバリバールは自らの思想を「政治哲学」という呼称を用いて形容するようになってきているが、こうした新しい展開は1980年代以前のマルクス主義者としてのバリバールとの連続性を見えにくくしている。そこで、本論文では、この政治哲学者としてのバリバールとマルクス主義哲学者とのバリバールの接点および断絶点を明らかにした。また、本研究を補完するものとして、二点の翻訳を共訳書として現在準備している。第一に、移民という大衆の実像のひとつのあり方を示した移民史研究の代表的著作であるジェラルド・ノワリエル『フランスというつぼ—19世紀から20世紀の移民の歴史』(法政大学出版局、サピエンティア叢書)、第二に、戦後フランスの政治哲学再興の流れにおいて中心的な役割を果たしたクロード・ルフォール『民主主義の創出—全体主義支配の限界』(勁草書房)である。『フランスというつぼ』については、まもなく刊行が予定されている。

本研究は以上のような成果を上げてきたが、その反面、博士論文の執筆が当初の予定より遅れている。2014年4月から始まる新年度内の完成に向けて、なお一層努力する。アラン・プロッサ教授と面談し、研究の進捗状況を確認してコメントをいただくために、4月および夏期休暇中に短期間の渡仏を予定している。また、滞在中はフランス国立図書館を利用し、資料の閲覧・収集を行うとともに、執筆を集中的に進める。その後、2014年度末に博士論文を提出し、2月下旬に審査を受け、本研究を完成させる。